

## 書 評

橋村 修 著

『漁場利用の社会史』

人文書院 2009年2月 272頁 3,500円＋税

副題に「近世西南九州における水産資源の捕採とテリトリー」とあり、対馬暖流「上流域」に相当する西南九州を対象地域とし、漁場利用を中心に、海陸双方からみた近世漁業の「テリトリー＝領域」の変容過程を、詳細な史料検討によって実証的に考察する。本書は学位論文とその後の研究成果をまとめたもので、内容に派手さはないが、近世史の学識に乏しく現代漁業地理を研究する評者にとっても、興味深く刺激的であった。

著者は「はじめに」の冒頭で、本書の主要課題を「海と人との関わりの歴史について海の利用のあり方から探る」と規定した。これはおそらく、著者一生の研究課題であろう。その研究意識は、「結果として」江戸時代人の自然環境との関わり方への興味にも繋がっていることを明記し、本書の応用範囲を示唆している。

本書の主要部分は5つの部分から構成されている。最初は「序章」、第2に「第Ⅰ部 五島列島における漁業と漁場利用」、第3に「第Ⅱ部 肥後天草郡の周辺における漁業と漁場利用」、第4に「第Ⅲ部 薩摩藩における漁業政策と漁場利用」、第5に「終章」である。以下、特に興味深い部分を中心に評する。

「序章」は、研究視座と問題設定、漁場利用史の研究史、本書の課題と構成、本書で用いる主な用語について、の4節からなる。まず最初に、生業領域論と漁場利用論をむすびつけて、漁場利用に注目して近世臨海集落の「社会史」を描き出す目標を立てた。次に、従来の漁場利用研究史を、「社会関係」（漁業権、漁業請負制など）と「技術と自然環境」（資源利用、用益形態など）の2点から整理した。そして、既存の村落共同体発展段階論にとらわれず、近世漁場利用の検討では磯・地先漁業だけではなく、沖合漁業も十分に対象となり得ると指摘した。

具体的には、漁場利用の技術的・生態的背景と

社会的背景をふまえ、文書史料や絵図などの地域史料を用いて、多様な漁業が併存した複数地域における漁業権と漁場利用の詳細と変化を比較考察することが本書の目的であることを言明している。同時に、「網代」漁業への注目と「沖は入会」という定説への再検討を示唆する。21頁の図序-1は、本研究の基本的枠組みで、結論の一部が既に空間的にはある程度図示され、海陸双方への研究意識も明示する。著者によれば、研究対象地域とした五島列島、天草諸島、薩摩沿岸は、捕鯨業研究を除けば、近世漁業史研究がまだ少ない地域であるという。

「第Ⅰ部 五島列島における漁業と漁場利用」は、本書に関わる「肥前国五島列島の地域概要と史料」をまず紹介し、第1章「中・近世移行期の上五島における網代の権利—13世紀後半～17世紀後半—」、第2章「五島への他領漁業者定着と漁業権の変化—18世紀中葉以降の福江島大敷網漁業を中心に—」を実証的に論じる。

第1章でまず興味深いのは1377年の（史料1-7）にある「かつをあみ、しひあみ、ゆるかあみ」の記述である。特定の魚名がついた網名は、その魚種が14世紀後半にすでに資源として特に強く認識されていたことを示す。次に興味深いのは図1-7である。この図は、それ以前の図表をふまえ、上五島における13～17世紀の漁法変遷を系統的に示した図1-6を、利用空間配置に注目して模式図化したものである。海岸線を境とする海域（「ウミ」）と陸域（「オカ」）の住民利用区域を、臨海集落（「浦集落」）を中心に同心円状に示した。「ウミ」は「セ」から「オキ」へ利用され、「オカ」は「サト」から「ヤマ」へと利用が進む。このように「ウミ」と「オカ」を連関させ、その用益と利用区域を模式化したのは面白い。ただし、「ウミ」側の表は「発生期の網」「分割網」「網代」「番立網代」「小網（うきうお）」といった歴史的経緯と集落からの距離を考慮した順に列編成したほうが、「浦集落」を中心とする同心円状模式図と表中の様子が視覚的にもきれいに対応するように思える。とはいえ、研究対象地域

が増えれば、その利用区域の内容配列・距離帯の大きさで各集落の主要な特徴を集約表現できる、価値ある模式図表現である。

著者はこの模式図の提示と同時に、「待つ」系統の「網代」漁業と「追う」系統の「小網（うきうお）」漁業の相違を峻別する。この章の最後では、漁業争論史料を検討した上で、上五島有川湾では、元禄期における漁業制度上の境界線と漁業利益の領域的広がりやズレていた可能性を指摘した。

第2章では、富江陣屋領上五島魚目において、薩摩・宍岐・紀州・越前・和泉佐野・紀伊・讃岐・周防・呼子等からの他地出身者（表2-1）が侍格・村役の身分を得て、延網から敷網への漁法変化による再編漁業権を獲得する経緯を解説する。この定着過程と、平戸藩領上五島浜ノ浦で他地出身者が網代漁場を発見してその漁業権を獲得し、その収益による藩献銀で村役人の身分を得て定着する過程に著者は共通点を見いだした。すなわち、支配者名目の違いを越えて、五島では漁業者のふるまいに共通点があったといえる。さらに、外来漁業者が福江島北岸漁場あるいは海域を独占する過程を、絵図と文書から解明する。この独占過程は図2-3にうまく模式化されている。

五島列島は現代旋網漁業の最先端地で、奈良尾・生月・長崎・下関等を本拠地とする九州地方の大中型旋網漁船団が、1970年代に東日本太平洋側（北部太平洋海区）旋網漁業に大きな技術革新をもたらした。しかし、この時代には、瀬戸内・北陸あるいは紀州から、新規漁業者が参入していたという史実はとても面白い。新しいものが常に西から東、南から北へに動くわけではない。

「第Ⅱ部 肥後天草郡の周辺における漁業と漁場利用」は、本書に関わる「肥後国天草諸島の地域概観と史料」を最初に紹介し、第3章「17～19世紀の天草郡における海面占有にみる漁村間の階層性」、第4章「近世漁村（浦方）の占有する海域と実際の漁撈活動との関わり」、第5章「18～19世紀の天草郡周辺地域における出漁・入漁をめぐる争論」を実証的に論じる。

第3章は、天草郡における漁場占有にみる近世末期漁村の階層性とその漁場の形成過程を論じる。図3-1・2・3・4等の地域漁場図をふまえ、

表3-5に幕末期天草郡における漁場の3類型を提示する。近世を通じて漁場は必ず再分化（あるいは細分化）されたわけではなく、新規参入者には限定的漁業権が付与された傾向があると同時に、中世から近世初期以来の漁業特権を維持した漁村もあったことを示し、新技術による大規模な沖合漁業がその特権的漁村によって担われていったとした。現在の主要な水産都市・漁村で、この「特権漁村」起源がどのくらいを占めるかは興味深い。この天草でいえば、牛深は間違いなく、現在の日本全体でも、漁獲物の主要水揚地である。

第4章は、漁場占有と漁場利用のズレ、沿海住民の水産資源認識の相違を論じ、結果として争論が生じるような多様重層的な漁場利用があったことを証明した。陸上における行政的な地域区分・領有観念が海上ではそのまま当てはまらないことは、近世から現代に至るまで、商品経済的な漁業の陸上行政域を超えた広域性をよく示している。

第5章は、近世の天草郡域における沖合漁業を出漁・入漁の争論等を通じて検討する。その代表的漁業である「八田網」は「回遊魚の鯛魚群を篝火で集めて巻き網で捕獲する漁業」と説明され、灯船を使う現代の九州旋網漁業（ただし、現代の主要漁獲対象は鯖と鰹と鮪）に繋がる。筆者は、現代の底曳網漁業に繋がる手繰網漁業もあわせて検討し、移動漁業に関わる漁場再編が漁業種類と対応社会により多様であったことを論じた。すなわち、八田網漁業は近世では空間的に画定されず、大正期における漁船動力化で漁場が面的に再編された。それに対し、手繰網漁業は、近世期にすでに漁場が面的に規制されていた。さらに、この八田網と手繰網は他領地先漁場にまで侵入していたという。これは、日本「遠洋漁業」が他国「沿岸漁業」になり兼ねなかった近過去の事実とも重なる。筆者は、近世漁場研究の基礎概念「地先一沖」という枠組みが「陸からの視点」によるもので、海上での漁業空間をうまく説明できない可能性を指摘したが、これは現代漁業の研究にも当てはまる。

「第Ⅲ部 薩摩藩における漁業政策と漁場利用」は、本書に関わる「南九州（薩摩藩領）の地域概観と史料」をまず紹介し、第6章「薩摩藩における漁業政策」、第7章「薩摩藩における漁場利用」

を実証的に論じる。

第6章は、幕末期薩摩藩の漁業政策を概観し、この時期作成の絵図の正統性を論じた。また、近世には各藩（地方）独自の漁政機関が少なかったことを示し、幕末の薩摩藩が一時着手した漁業振興の独自性も指摘した。関連づけていうならば、日本漁業の質的最大期であった1960年代でも、漁業関連の最高研究教育機関である大学水産学部・水産大学校等は、日本の限られた各地にのみ存在したし、現在ではその数を減らしている。

第7章では、第6章で示した絵図をより詳細に読み込み、幕末期薩摩藩域における郷別の漁業と漁場利用を論じた。たとえば、運上銀を負担するための網代・瀬は、その浦が属する郷の地先海面にほとんど存在したが、一部は他郷の地先海面にもあったことが判明し、加世田郷では地先網代と沖合瀬が定点漁場として認識されていた。薩摩の沖合カツオ一本釣漁業では、17世紀以降に開発されて入会海域であった「中之瀬」漁場が、出漁運上の発生と19世紀前半の漁場争論を経て、加世田郷に排他的に独占された。

「終章 まとめと考察」は第Ⅰ～Ⅲ部をふまえ、西南九州における近世の多様な漁場利用の歴史的变化と地域比較をまとめている。表終-1は、本研究で検討した漁業の種類と権利を一覧にまとめ、漁業の名称、漁場の位置、漁業資源の回遊性・定着性と漁法の特徴（「待つ」か「追う」か）、権利の主体（個人、村、入会）と空間・漁法要素というように、考察視点を明示した。図終-1は網代漁場の再編模式図、図終-2は沿岸分割地先漁場の再編模式図、図終-3は沖合漁場の再編模式図である。従来他地域研究を対照し、東シナ海という「外海」に面した研究対象地域の特性を再確認している。

五島列島、天草、薩摩を比較対照した上で、中世的漁業が残る辺境地ながら、近世における西南九州は、視点を換えれば先進漁業地域と言い得るとの結論は、評者も大賛成である。無論、現象の種類にもよるが、何でも政治中心近接地域に最先端があると考えerるほうがおかしい。それならば、「極東」日本など、「世界政治の中心」から遠隔地にあつて、当然「後進地域」となる。「先進／後進」という区別・概念自体が、評者は問題あると

考えるが、現代における日本水産業の「先進地域」は、政治中心地に近接などしていない。

著者は最後に、漁場利用と自然生態との関わりを、漁場利用にみる「自然の領有」、漁場利用の枠組と重層的の所有観からまとめ、漁場利用の権利と漁法の変遷が多層的で地域的に多様であることを念押しする。これは、単純な発展段階論が地域変容の実態説明には通用しないとの言明である。また、近世漁民による封建社会の枠を越えた生業は、農山民による「一地一作」原則の生業と大きく相違すると指摘した。この漁業者の特殊性は、現代でも当てはまることが多いのではないか。

本研究への無い物ねだりをひとつだけ言うなら、水揚地（漁港魚市場）の整備とその先の陸上流通経路、市場需要への言及である。資料制約もあり、主題ではないだろうが、それらが判然すれば、漁場利用の重層化あるいは新規漁業者参入の背景をより納得できた。

著者は今後、本研究の成果を、日本列島の他地域事例、東シナ海沿岸および南西諸島の地域事例と比較しつつ、環東中国海漁業の共通性、「海上の道」の視点も加味して、「海の権利と利益慣行の特殊性」を検討吟味し続けたいとする。評者の勝手な希望を言うなら、対馬暖流「上流・源流域」は著者の最大・最高の詳細研究対象地域として今後も研究を期待するが、同時に対馬暖流「下流域」それも「最下流域」にも目を向けていただきたい。そこには、西南九州と対照的でもあり共通性もある、日本最大級の水産地域、東北日本が広がる。カツオおよびイカの一本釣漁業の最大水揚地も、マグロ延縄漁業の最大本抛地も、旋網漁業の過去最大水揚地も東北日本にある。せめて、イカ釣漁業だけでも、日本列島の南から北まで各地の「漁場利用と自然生態観の実態と変遷、地域差」を知ることができたらどれほど楽しいことか。

本書は、名称にもみられるように、海側からも漁業・漁民・漁業集落をみる複合的・学際的視座を特徴とし、漁業地理学の一大主流、藪内芳彦、大島襄二、柿本典昭、斎藤毅、田和正孝といった先達の流れを汲む。また、本書の研究内容は地理学・歴史学・民俗学等の河野通博、大喜多甫文、秋道智彌、遠藤匡俊、古田悦造、伊藤康弘、末田

智樹ほか諸氏の研究を踏まえている。本書の帯には秋道氏による「網代・沿岸・沖合における漁場論を、幕領と藩領による支配領域を踏まえ社会史として展開した本書は、漁業史研究の新しい幕を開いた」との評価文が記載されている。

名士推薦を別にしても、この専門書は研究心を刺激する。単なる歴史地理学書ではない、魅力的・発想刺激的な専門書である。以上、不勉強ゆえの読み違い・偏見はすべて評者の責任である。  
(篠原秀一)